

## 遠い留学から

— 若き研究者への反面教師 —

清水 憲男

若い学究者の参考になりそうなことで、なにか原稿を書くようにとのご依頼を受けました。自分がまだ若いと思っていたのがつい先ごろのように思えるので、ご依頼に少なからず驚かされました。しかし驚いた理由をあらためて考えてみると、定年を間近に控えたはしくれ教師の私は無為に齢を重ねてきただけで、学問的にはまったくの「ひよこ」でしかないとの偽らざる実感があるからに相違ないと、妙な納得をしたものです。

軽率にも原稿をお引き受けしてしまった私に、研究を目指す若き学徒に向けて直接役立つことなど書けるはずもありません。ならばどうやってお茶を濁すか。仮にできることがあるとするなら、若い頃の留学時代のことも書いて、反面教師に徹することぐらいですので、それでご容赦をいただきたいと思います。

### 留学まで

大学に入ってスペイン語を学び始めて2年目の後半、偶然スペイン19世紀の某詩人の詩集に独学で挑戦しました。いい加減な語学力で詩に挑むなんて無謀の極みであることを、直感的に思わないわけではありませんでした。でも根っから天の邪鬼の私には、密かな別の思いがありました。詩はそれが何語によるものであれ散文と異なり、通常論理では書かれていないはずだ、仮に論理があるとするなら、詩的な直観論理みたいなものではないだろうか、だとすると本来の論理や学校文法通りに素直に書かれていない詩は、表面的な語学を素通り、あるいは上辺の語学力を乗り越して、逆に未熟な語学力をもってしても肉薄できるのではあるまいか……。つまり今から考えても奇妙な話しですが、私は語学力にそこそこ自信があったから詩に挑んだのではなく、ちょうど逆で、語学力に自信がなかったからこそ、それを正当化するかのように、怖いもの知らず、かつ怖いもの見たさで詩に挑んだのでした。

この無謀としか言いようのない行為は文学を読むというより、勝手に想像力を飛翔させる遊技であると同時に、実は私の思いとは裏腹に、今からすれば語学学習の域を出るものではなかったように思います。というのも何度も読んでいううちに、まず語学レベルで正確に意味を把握しなければ詩人に申し訳ない、事実いても立ってもいられない箇所を幾度となくぶつかることで、何種類もの辞書や文法書をひっくり返すようになっていったからです。日本で出版された文法書ではどうにも説明できない、もしくは納得できない言い回しに気づいてゆきます。そこでネイ

ティブ向けの高度な文法書 (S. Gili Gaya, A. Bello, R./M. Seco, A. Alonso, P. Henríquez Ureña, R. Lenz など) を片っ端から読破してゆきました。否、こうした文法書も本当に読みこなせていたかどうかは怪しいのですが、とにかく詩を深く正しく読み込むために、遅まきながら文法書を読む必要にかられたわけです。そしてこのことが結果的に大いに役立ったように思います。

文学史の知識も皆無のまま偶然読んだ後期ロマン派の詩は、私のいい加減な思い込み・誤読を含めて、20歳の学生に計り知れないインパクトを与えました。ことによるとスペイン文学は一生をかけて勉強するだけの価値と深さをもつものかも知れない……。問題はこれからでした。スペイン文学といってもスペイン文学の先生は一人もいらっしやいませんでした。よってスペイン文学通史の授業もなければ、専門科目もありません。五里霧中とはこのことで、セルバンテスぐらいはともかく、誰が重要な作家かも知りません。ともかく自分の語学力のなさを痛感しながら、執念深い語学学習と、無鉄砲でまったく我流の文学講読とを続行させるしかありませんでした。

日本でスペイン文学の本格的な勉強ができないのなら、スペインに乗り込んで本物の先生の講筵に列するしかないとの思いから、卒業したらすぐにスペインに渡ろうと決断しました。就職活動はもちろんせず、文学を学べる大学院も日本にはないので大学院の入試勉強をするでもなく、頭は留学のことでいっぱいでした。家に留学させるような経済的余裕がないことなど、ほとんど頭をかすめることもなく、スペインで学ぶ自分の姿を夢想するばかりでした。ところが正確な時期は覚えていないのですが、突然とんでもない情報が舞い込んできました。日本とスペインの教育制度の違いにより、自分は日本の大学を卒業する graduate でしかなく MA ではないので、スペインに行ってもいわゆる外人コースにしか入学を認められず、スペイン人のような正規の大学院 (博士課程) への入学はありえない、というのです。

近視眼になっていた私は、ある意味では当然のこうした事態を予測していなかったために、お先真つ暗になりました。ただでさえ迷走ばかりの独学で文学を志してきたのに、スペインに渡っても入門みたいなのしか学べないのでは、もはや留学の成果と意義は知れていました。諦めて就職しようにも4年の終盤で、就職口などあるはずがありません。それ以上に、やはり学びたかった、教えを請いたかった。苦肉の策として足踏みをするしかありませんでした。残された選択肢は、特に勉強したくはなかったけれど言語学の大学院に進んで、肩書きだけの修士 MA を取ることをもって、スペインで本格的に学ぶ資格を得るだけでした。ところが言語学の基礎知識がありません。そういう科目を履修したことさえありません。入試科目はたしか言語学、スペイン語言語学、スペイン語、英語だったように思います。

スペイン語と英語は今さらジタバタしても始まりません。否、それまでのガリ勉のおかげで、ある程度の自信がありました。スペイン語言語学も文学と平行させた独学でなんとか誤魔化せるのではないかと思いました。肝心の言語学の全般的な知識はゼロです。一夜漬けならぬ三夜漬けぐらいのインチキ勉強で、Sapir, Bloomfield, Saussure, Jakobson, Jespersen, Chomsky などのことを上っ面だけ丸暗記して試験に臨み、なんとか合格しました。合格したというより、私の苦境

を知った先生方が哀れんで合格させてくださったに違いありません。大学院の合格者リストに私の名前があっても、まったく嬉しくなかったのを覚えています。自分の志すところと最初から違う部署に身を置く羽目になって、出鼻をくじかれた結果だったからです。

田舎の親に経済的な負担はかけられません。勉強に邁進する以前に、猛然とアルバイトをしなくてはなりません。授業の合間を縫いながら、月曜日の昼休みは特許庁（当時）に行つてスペイン語教師、月、火、金は大学の夜間スペイン語講習会講師、水曜日の授業が終わると毎週、電車で飛び乗って故郷の静岡県富士市にある製紙会社に行つて（会社がアルゼンチンに進出するというので）スペイン語講師、その晩は実家に泊まって翌朝もう一度同じ会社で講師をして、そのまま東京に舞い戻つて大学院の授業に出席する。土、日はスペイン人の某先生が学部で文学史の授業を日本語でおやりになるというので、その原稿をスペイン語から講義用の日本語に翻訳する・・・さらにあまり興味のない言語学を片手間に勉強しながら、実際には本業の（？）スペイン文学の独学を続けました。修士課程に在籍した2年半で、週末にアパートから外出したのは2回だけだったのを覚えています。授業料はなんとか親に出して貰つて、あとは自活するのに懸命で、まさに風邪を引く間もありませんでした。

なんとか修士論文を書き上げて、スペイン政府の奨学金を得、ようやくスペインに渡ることができるようになりました。アエロフロート機に乗つて羽田からパリに向かいました。1969年に知り合ったフランス人の友人（現在パリ大学ドイツ哲学教授）の家に数泊居候をしてから、夜行列車でマドリードに向かいました。夜明けに外を見た時の衝撃は忘れられません。朝焼けで輪郭を整えてゆく風景は平坦かつ殺風景で、この先に本当に町があるのだろうか、マドリードなんてとんでもない村でしかないのではないかと。こんな国で勉強なんてできるのだろうか。そもそもこんな殺伐とした国で、自分が感動した文学作品が本当に書かれたのだろうか、と真剣に疑ったものです。

## 正規の学生証

ともかくマドリードに着きました。スペイン政府の奨学生ということで国立マドリード大学での授業料は免除されました。3食付きの寮費を払うと奨学金はほとんど残らなかったために、本を買う余裕などとてもないことを見越して国立図書館に近い寮に入りました。その寮は今では潰れて跡形もありません。食事、部屋、なにをとつてもひどい寮でした。二人部屋の同室相手は南のコルドバ出身で経済を専攻していました。今は田舎で農業をしていて、数年に一度会つて旧交を温めています。

博士課程の登録は複雑怪奇なものでした。当時、日本とスペインとの間に正式な文化協定のようなのが無かったために、私のように博士課程に在籍を求める日本人に、事務局もどうして対応したものか分からず、大学事務局→外務省→文部省→日本大使館→大学事務局→外務省と、延々とたらい回しにあいました。毎日のように言われるがまま動いて、2ヶ月ぐらいしてようやく博

士課程の学生証を手にしてやれやれと思ったのも束の間、今度は大学の掲示板に奇妙な張り紙が出ました。「スペイン語を母国語としない外国人学生で博士課程に登録した者は、現在の学生証を正式なものとして認定するべく、スペイン国法律〇〇条により、〇月〇日に国家試験を行う」。目を疑いました。それならなぜ最初に試験をやって、受かった者だけに学生証を発行しないのだ、と。

当日会場に行ってみると一対一の口頭試験でした。しかも私に用意されていたのは、なぜか日本文学通の教授でした。第一問は「日本の俳句の叙情性について説明しなさい」、第二問は「徳富蘆花におけるロシア文学の影響を説明しなさい」、第三問は「(英語で言う) poem と poetry の差を説明しなさい」。自分は日本文学の専攻でもなければ、スペインくんだりまで日本文学を学びに来たのではない、と試験官に食ってかかりたい衝動にかられましたが、文句を言ったらもちろん落とされます。狼狽を隠しながら必死に答えました。私の実家には本などろくにありませんでしたが、なぜか(分からないまま終わってしまいましたが)偶然、徳富蘆花全集があって、高校時代に何冊かは読んで解説などで多少の知識は持っていました。とにかくいい加減な答えだったに違いありませんが、(大きな声じゃ言えないけれど)試験をおやりになった先生の日本文学の知識も実はあまり大したことはなく、私の苦し紛れの返答にいちいち頷いておいででした。とにかくにも試験を、またまたお情けで通していただき、マドリード大学博士課程の正規学生になることができました。(昨今の留学生がスペインに渡って比較的簡単に博士課程に入れるようになったのは、こうした私の犠牲に負うところが多い!、とまあ思っているわけです。)

授業が始まって「スペイン黄金時代演劇」、「古典文学論」、「スペイン思想史」などを履修した以外に、学部の「セルバンテス論」、「スペイン近代史」などの授業を聴講し、学生寮に戻るや国立図書館や高等学術研究所の図書館に籠もって黙々と勉強をする日々が続きました。当たり前のことですが、ない本がない・・・文献に関して一切の申し開きができない環境です。しょせんは外国人の私にとっては、きつい授業が少なくありませんでした。ある時など、ゼミ発表で当てられた本は2巻のイタリア語による研究書でした。イタリア語は読めませんと言った瞬間に相手にされなくなるので、当てられると「分かりました」と言い、国立図書館でイタリア語→スペイン語辞典を片手に解読したこともあります。すべてが懐かしい思い出です。

## 読む

あつと言う間に1年が過ぎました。2年目になると、自分がスペイン語の古文をまだまだ読んでいないという実感を濃くしてゆきました。日本の学部3,4年生で中世スペイン語をかなり独習して卒業論文も中世長編叙事詩について書いたこともあり、多少の読解力はあったはずなのですが、多分に怪しい憶測におんぶしている自分が怖くなってきました。そこで今度は「スペイン語の史的形態構文論」なる授業を履修することにしました。これが私の留学を本当の意味で決定づけることになるとは、当初予想だにしませんでした。

担当教授は Rafael Lapesa・・・スペインの古典文学、文献学、言語学を多少なりともかじっ

た者で、この大教授の名前を知らない人はいません。学生の間で「マドリード大学最後の巨星」などとも囁かれていました。私も日本でこの先生の古典的名著『スペイン語史』を精読していましたが、あまりに次元の異なる大教授で近寄りたく、授業に出てもいつも最後列のほうで小さくなりながら、一言も聞き逃すまいと耳を澄ませました。

小柄の大教授の講義はまさに圧巻でした。こちらが先生の高度な授業内容についていけるか否かはともかく、その時点でお考えになっている極限の事項を惜しむことなく、丁寧に論じてくださいました。それがこの先生の、学生への誠意の尽くし方だったのです。わずか5、6行の古文の断片を引用され、それを約2時間かけて縦横無尽に論じられる。こちらがその数行を1～2分で一応「理解できた」と思い込んでいても、教授の手にかかるると2時間かけても語りきれないほど、その断片がみるみる生き物と化して変貌してゆくのです。スペイン語史、歴史、社会、文学などの膨大な知識がもの見事に、そして必然かつ有機的に絡み合い、こちらが「理解できた」はずだった数百年前の断片が、生命力をみなぎらせて息を吹き返し、変な言い方をすると、言葉が躍動し始めるのです。しかも先生のご説明には一切のこじつけも、恣意的な思い入れもありません。受講している私はその読みの奥行き、慧眼、博識、洞察力、統合力に息苦しささえ覚えて圧倒され、授業が終わると疲労困憊していることが一再ならずありました。それは私が日本で勝手にあこがれていた「本物の先生」の域を遙かに凌駕するものでした。これこそが単なる「博識」を遙かに越えたもの、哲学者 Ortega の言う「学問」<sup>1</sup>に違いないことを確信しました。

言葉を読めるというのは、いったいどのレベルのことを言うのだろうか、この時ほど考えさせられたことはありません。敢えて言いましょう。私にはこの原体験があるので、若い研究者、否、若くない研究者でも「言葉（外国語）は単なる手段でしかない」などと、うそぶいて超然としている人、「たかが語学」などと睥睨する人と遭遇する度に、「ああ、この人は読むことのすごさ、怖さを知らない人だ、言葉の重みを知らない人だ」、つまり「読めない人だ」とまで思ってしまう。若い研究者がなにかの文献を指して「あの文献は読みました」などと得意そうに言うのを聞いて、その文献を私も読んでいて、私の恩師には遙か遠く及ばないまでも多少の疑似体験をしている場合には、その発言にぞっとさせられたり、愕然とさせられたりすることが少なくありません。「読んだ」ということと、「読めた」との間には大変な落差があることに気づいていない場合が圧倒的と言ってよさそうです。

私が学部の4年生か修士1年の時に英語の勉強を兼ねて読んだ本に M.J. Adler の *How to Read*

<sup>1</sup> “Ciencia no es erudición, sino teoría. La laboriosidad de un erudito empieza a ser ciencia cuando moviliza los hechos y los saberes hacia una teoría. Para esto es menester un gran talento combinatorio compuesto en dos compensados de rigor y de audacia.” Ortega y Gasset, José, *Espíritu de la letra*, Madrid, 1985, p.15. 同じく Samuel Gili Gaya の次の指摘参照。 “El simple saber noticioso de bien poca cosa puede servirnos, si no va acompañado de un esfuerzo de interpretación.”, “La lexicografía académica del siglo XVIII”, *Cuadernos de la Cátedra Feijoo* [Univ. de Oviedo], 14, 1963, p.7.

*a Book*<sup>2</sup> という古典があります。タイトルはまさにハウ・ツーもので、かなり軽い響きのする本ですが、中身は決して軽くありません。これだけ本格的な内容のあることを、これほど明快な英語で書くことができることに驚いたものです。それはともかく、本書の序文に大学生のほとんどは本を読めない、それどころか大学の教員でも本を読めない者が実に多くいるとの刺激的なことが書かれていて、学生の私は妙に痛快な思いをしたものですが、Lapesa 教授の講筵に列して、自分もまだまったく読めていない一人であることを痛感させられたのでした。教授はあくまでもご自分に厳しいが故に、学生にも厳しさを求められました。試験では数行の断片（有名な書物からではない）が引用されていて、それをスペイン語史をはじめとするすべての知識を総動員して、何世紀の何年前後のもので、どういう系統であるかを判断させ、その論拠を詳述させるというものでした。油断しようものなら、数百年単位で間違ってしまう紛らわしいものもありました。

## 文献学

授業を受けているうちに、これが狭義のスペイン語史の授業ではなく、講義題目の「スペイン語の史的形態構文論」をも越えた、要するにフィロロジーの一つの到達点だと私は理解するようになりました。フィロロジーは「文献学」と訳されますが、どうもこの日本語がよろしくない訳で、かといって取って代わる訳も思いつきません。ドイツのギリシャ研究者ベック（Philipp August Boeckh, 1785-1867）は、文献学を「人間の精神によって生産されたもの、すなわち認識されたものの認識」と定義したそうです。たとえば古典作家セルバンテスを読む場合、この16-7世紀を生きた人間がどのような思い、どのような表象をもって16世紀の騎士道小説をはじめとする諸文化現象、人間像を見て消化したのか、彼は何をどのように認識して、読者にどのように認識させようとしたのかを、現代においてしっかりと受け止めなくてはならなくなります。1737年に刊行されたスペイン王立アカデミー最初の辞書で文献学の項を引いてみると、「文法学、修辞学、歴史学、詩学、古代、その他あらゆる諸学を動員のうえ、古典作家に関する解釈なかならず批判をもってなされる学」と、気が遠くなるほど壮大な定義がなされています。およそ昨今の「専門」と隔絶していると言わざるを得ません。こんな悠長なことを考えているから駄目なのだと自分を棚の上に置いて昔を軽視するとしたら、それは最初から負け戦としなくてはならないのではないのでしょうか。

そして私たちのように「外人」が古典に挑戦するということは、まさに想像を絶するような、決して誇張でなく死闘が必要となります。たとえば私の分野、スペインの古典文学を読もうとした場合、文学鑑賞などと生意気なことを言う以前に、実に多くの辞書類のお世話にならなくてはなりません。スペイン語は他のロマンス語諸国と比べると比較的安定度の高い言語などと言われますが、たとえば14世紀のJuan Ruizの長編詩*Libro de Buen Amor*一つを語学レベルで読もうし

<sup>2</sup> New York, 1967, 19<sup>th</sup> paperback printing.

ただで、中世スペイン語に関する膨大な識見はもとより、この作品専用の辞書を最低2つは用意しなくてはなりませんし、スペイン文学最初の記念碑的な作品 *Cantar de Mío Cid* を読もうとしたら、基本的な中世スペイン語、文法史 (Menéndez Pidal, Lapesa, Hanssen, Spaulding など) の知識だけでなく、この作品専用の文法書や辞書を座右に置かねばなりません。こういう実例を出し始めたら際限がなくなるのでやめますが、私などは若い研究者たちがいとも簡単に（もしくは簡単そうに）古文を引用したりするのを見るたびに、ぞっとしてしまうのです。本当に分かっているのだろうか、否、深い意味を本当に理解した上での引用なのか、と。私は Lapesa 教授の直接の薫陶を受けることができ、最低10年の紛れもない格闘を経、古文を読み始めてから40年以上をかけて、ようやくそこそこ読めるようになってきたかな、と思う程度でしかありません。よほど私の飲み込みが遅い、鈍いのかと自虐的になります。私が普段使っている古語辞典は最低20から30点あって、その多くが絶版なのに、この少壮の研究者たちは、どこでそれらに当たっているのだろうか、皮肉を込めて首を傾げたくくなります。中世スペイン語だけではありません。もっと時代が新しくなって16世紀あたりのスペイン語でも同じことです。スペイン文化の黄金時代、とりわけ16世紀のスペイン語に関しては最低限 Keniston の古典的名著<sup>3</sup>を精読していなければ、とんでもない誤解をおかす危険性が多々あることを知らないのだろうか、と思わざるをえません。絶版で入手が困難というだけで諦めてしまっているのでしょうか。だとしたら、敢えてきついことを言うと、それは厳正なる学問を最初から諦めたのと同じだと言われても仕方ありません。

## 碩学との面談

かくしてスペイン文学、とりわけ古典文学への文献学的アプローチの醍醐味に引き込まれていった私ですが、もともと日本で恵まれなかった指導者を求めてスペインにやってきたただけですから、博士論文のことは頭にありませんでした。自分とは無縁だと不思議な納得が最初からあり、スペインに最低2年、長くて3年滞在して先生に恵まれればそれでよい、と思っていました。毎週教室で教えていただいている教授はあまりに大物過ぎ、お忙しそうなのに加えて定年も見えているので、博士論文の指導は引き受けていらっしやらないことも知っていました。そもそも教室の後ろのほうに着席しているだけで、正体不明の外国人なんて相手にしてくださるはずがありませんでした。

それでも私は、一度ぐらい直接質問をしてお話をうかがってみたいという思いを募らせていました。ただ授業が終わるごとに意気消沈して、最後列のほうから先生を追いかけていって呼び止める勇氣は、どうしてもありませんでした。あつと言う間に一年が終わろうとしていました。レポートの課題が出されました。私は千載一遇のチャンスがやって来たと判断しました。私の理解

<sup>3</sup> Keniston, Hayward, *The Syntax of Castilian Prose - The Sixteenth Century -*, Chicago-Illinois, 1937.

や知識は知れているけど、このレポートで勝負をかけよう、先生が一応の評価をしてくださる、少なくとも目に留めてくださるようなレポートが書けないものだろうか。書けるはずがないことを承知で、とにかく挑戦を決意しました。そして先生から否定的であれ、個人的にコメントをいただけたら私の留学は十分な成果があったこととする、そしてもし無言のまま終わったら、私の留学には成果はあったものの、形式的には敗者として帰国するしかない、と思ったのです。とにかく懸命に調べ、懸命に考え、懸命に書き込んで、よく覚えていないのですが30～50枚ぐらいのものを締め切りぎりぎりに提出しました。

その後、先生からはなんの反応もありませんでした。1ヶ月経っても2ヶ月経っても、なんの反応もありません。やはり私ごときの努力は、本物の碩学の前ではゴミのようなものでしかなかったことを悔しいとも思わずに納得し、もうしばらく勉強してから帰国しようと発想転換をして落ち着いていました。そしてこれもよく覚えていないのですが、たしかレポートを提出して3ヶ月ぐらいしてから、まったく意外なことが起こりました。学生寮に住んでいた私のところに、Rafael Lapesa 教授から電話が入りました。いつか自宅に来なさい・・・耳を疑いました。どうやって私の学生寮の電話番号をお知りになったのだろう。とにかく先生の声を直接個人的に聞くのは初めてだったこともあり、私はうろたえました。私のレポートは締め切りぎりぎりまでかけて仕上げ、ネイティブにスペイン語をチェックしてもらうこともせずに提出してしまったものですから、内容以前に語学上の間違いや未熟な言い回しが多かったに違いありません。こんな未熟な形で提出するものではない、とお説教をされる覚悟で翌日の午後、先生のお宅をお訪ねしました。

緊張を抑えるべく、戸口で大きな深呼吸をしたのを今でも覚えています。呼び鈴を押すと先生がニコニコして出てらっしゃいました。一歩入ると廊下で、そこからすでに天井まで万卷の書で埋め尽くされています。奥の部屋に通されました。私はすっかり気が動転して喉はカラカラ、スペイン語もうまく出てきません。ソファに座るように言われました。先生はまったくレポートには言及されず、ゆったりと日本のこと、私のことを楽しそうに尋ねられました。具体的にはどんな問いにどんな返答をしたのかも、まったく覚えていません。長く感じましたが恐らく30分ぐらいだったでしょうか。抑えきれなくなった私は、「先生 (“Don Rafael”)、申し訳ありませんでした。あんなに未熟なレポートをあんなに稚拙なスペイン語のまま出してしまつて」とお詫びしました。すると先生は笑顔を崩さずに、意表を突くことをおっしゃいました。「いや、私はああいうレポートを要求したつもりはありません」。私はこれからいよいよ攻撃が始まると、咄嗟に覚悟をしました。「貴方のレポートには The Catholic University of America で出版されている○×の重要な文献が欠けていて、それを読んだ気配もありませんが、実によくできていて感心しました」。私はなにか別世界の話しを伺っているように思い、自分の思いが緊張の彼方に飛んでしまっていると感じました。

次の瞬間、それまでまったく考えもしなかった言葉が、私の口をついて出てしまいました。「先生、もし私がこのレポートにもっと文学的な要素を入れて学位論文を書くとお申しあげたら、先生は指導してくださるのでしょうか?」。先生が博士論文の指導をすべて断つておいでだったことも



承知で、本能的に口を滑らせてしまったのです。先生は相変わらず笑顔を崩さずに、ゆったりと「私が貴方と呼び出したのは、そのためです」・・・嬉しいというより、どうなっているのだ、どうすればいいのだ、途方もなく大変なことになった、との思いで、先生によりしくお願ひしますとだけ申し上げ、日本式に深々と頭を下げて学生寮に小走りで戻り、勉強を猛然と再開しました。

## 論文

実は問題のレポートのテーマは、あまり私に関心のあるものではなく、どちらかというと言語研究に近いものでした。それを文学と絡めるとは言うてはみたものの、本来自分のテーマでもなければ、特に見通しがあるわけでもありませんでした。でも、私にとって大事なのはそんなことではなく、あの世界的な大学者に個人的なご指導をいただけることのほうが遙かに重大でした。今のようにワープロやパソコンがある時代ではありません。手書きである程度草稿を書き進むと、今度は安物のタイプライターでそれを打ち込んでゆきました。論文を打ち込み始めたところで、ふと日本で読んだ吉本隆明の本の後書きが思い出されました。今しがた、その本を数十年ぶりに引っ張り出してみました。こんな言葉が記されています。「わたしの心は沈黙の言葉で<勝利だよ、勝利だよ>とつぶやきつづけていたとおもう。なにが<勝利>なのか、なににたいしてなぜ<勝利>なのか、はっきりした言葉でいうことができない」。<sup>4</sup>

まだ着手し始めたばかりで、それがどこに向かって行くのか、そもそも形を取るにいたるのかもまったく分からないのに、タイプライターを叩きながら傲慢にも「勝利だよ、勝利だよ」の言葉に私は酔いました。章を書き進めるごとに先生に提出してコメントをいただくことになりました。コメントは実に簡単で、余白のところどころ数語の批判が加えられることがほとんどでした。とんでもないミスを犯して、¡No!, ¡No!, ¡No! とだけ書かれ、私はどこが ¡No! なのか分からず、その周辺のことを徹底的に勉強し直さざるを得なかったこともありました。その時に、なぜ ¡No! なのかを詳しくご説明いただければ、私には手っ取り早くてありがたかったのでしょうか、詳しくご説明いただかなかったことで、逆に根本から勉強し直すことができました。

それでも本当に困ったことが二つありました。一つは内容にかかわることでした。先生が珍しく数行からなるコメントを書いて私の誤りを指摘してくださいました。何回読んでも、そしてその時点で私なりにいくら調べても、先生のご指摘が理解できませんでした。私には先生のご指摘が絶対に正しいという確信が、単なる謙虚とかいうことを越えてありました。よってなにがなんでも先生のご指摘を理解したいと思って考え、調べ続けました。でもどうしても分かりません。直接そのことを先生に申し上げる勇気がなく、私は敢えて正直に手紙を書き送りました。「私には先生のご指摘が絶対に正しいという確信があります。でも現段階での私の未熟さでは、どうしても先生のその正しいご指摘に至ることはかないません。私は自分の理解の及ばないことを、自

<sup>4</sup> 『言語にとって美とはなにか』、第II巻、昭和44年、第10刷、291ページ。

分の論文の主張として拝借するだけの勇気を持つことができません。従いまして先生のご指摘は本当にありがたく思いつつも、それを理解できる日まで、現段階での私の限界に忠実になる未熟をお許しねがいたく存じます」。先生は、それ以降、この点に関してはなにもおっしゃいませんでした。

とにもかくにも私にとって大事なことは学位を取ることではなく、直接この先生に師事して教えるを請い続けることにありました。そしてたった今、それが実現しつつあることに信じられないほどの喜びを覚えていることこそが「勝利」でした。生意気なことを言うようですが、私は若輩ながら博士という肩書きそのものを、さして重視していませんでした。一生の宝になるすばらしい教えを受ける幸せを前にしたら、肩書きなどはちっぽけなことではかありませんし、学位は一つの経由点もしくは出発点でしかなく、到達点、ましてや目的などでは絶対にあり得ないはずで

他のスペイン人学生達の論文指導を断られていた先生が、私ごとき不出来な外人の指導をお受けになったらしいという噂が広まって、あの日本人は胡麻をすったに違いないをはじめとする誹謗中傷にもあいましたが、そんな噂に構っている暇はありませんでした。そもそも師がいわゆる胡麻すりごときで動かされるような方ではないことを、私が誰よりよく知っていました。ともかく当時、スペイン人が平均して博士論文に5年かけると言われていたのを、実質1年半で夢中になって書き上げました。もちろん未熟極まりないものですが。

もう一つ、思わぬ壁にぶつかりました。せっかく本体ができあがったのに、どうしてもスペイン語にならない箇所がぶつかりました。巻頭につける「謝辞」と「献辞」です。高尚な理屈をこねるでもなく、簡単に書けると思っていたのに書けません。何回謝辞を書き直しても「嘘」のように思えるのです。否、こんな上っ面のことじゃない・・・私の心からの謝意が先生に向けてであれ他の人に向けてであれ、書いても書いても私には嘘に思えてしまうのです。心を込めれば込めるほど日本語しか出てこない、心がスペイン語に乗り移らないのです。スペイン語はやはり「厳粛な意味において外国語」であることを、痛いほど知らされたのはこの時でした。ともかく何回も何回も書き改めて、不満足ながら2枚からなる謝辞としました。もっと困ったのが「献辞」です。両親への献辞にすることは決めていましたが、まったく駄目です。私の両親は旧制中学しか出ておらず、ローマ字も読めませんでした。その両親向けにスペイン語で書いたって理解するはずがありません。それ以上の問題は、数語のスペイン語で書いてみたものの、先ほどの謝辞以上に大嘘、白々しく思えてならず、「嘘つきの自分」に嫌悪さえ覚えました。さんざん迷った挙げ句、先生のところにご相談にあがりました。両親がスペイン語を解さないだけでなく、スペイン語ではどうしても気持ちが込められないので、ここだけ日本語で書かせてください、と申し入れました。先生は微笑みながら、「いいでしょう。でも私たちにも分かるように、一応スペイン語訳をつけてください」とおっしゃってくださいました。そこで私は「本論文を、かくも遠く近き我が両親に捧ぐ」(A mis padres, tan lejos y tan cerca)と献辞をしたためました。

前例のない日本人の学位論文の審査が行われたのは1月の寒い午前中でした。1時間半ぐらいの厳しい審査が終了し、壇上から降りてこられた審査委員長が私の手を握って、「ご両親におめ

でとうとおっしゃってください」・・・私は呆然としながら、ひょっとすると、この言葉をいただくために自分はこの論文を書きしてきたのかも知れない、この3年半はこの一言で、もう十分報われたのかも知れないと思いました。

細かなことを具体的に書き留め始めたらしきりが無いほど本当に苦しく、この上なく楽しく、なによりも充実して恵まれた留学でした。審査の翌日も私はいつものように Lapesa 先生の授業を聴講し、3月の帰国前日まで出席し続け、私にとって最後の授業に出席してから先生の研究室にお邪魔し、翌日帰国する旨をお伝えすると共に心からのお礼を申し上げ、先生の主著に献辞を書いていただきました。1976年の帰国前日に書いていただいたその献辞は、秘密です。

## 困窮

恩師に関しては、これ以上恵まれようがなかったわけですが、決して順風満帆ではなく、とりわけ経済的には苦しみの連続でした。経済的な裏づけがなく、仕送りを受けるのもままならない状況でした。留学一年目はスペイン政府の奨学金を得たものの、延長は最初から一切認められないものでした。しかも夏休みには奨学金が支給されません。夏が近づくとパリ郊外に住む友人に手紙を出して、長期の居候をさせてもらいました。マドリードから夜行列車に乗って行くにも電車賃がなく、ただでさえ寮費を滞納しがちだったのに、寮の事務室に行って電車賃を貸してもらいました。事務を担当していた修道士に何回となく迷惑をかけてお世話になり、特別に朝食を食べさせてもらったことも少なくありませんでした。

あまり困窮話をすると、ただの苦学生的美談になって逆に怪しまれたり、同情をかうだけなので最低限にしますが、2年目はスペイン人の篤志家のお世話になり、3年目には万策尽きた感がありましたが、奇跡的にスイスの財団から支援してもらうことができました。スペイン研究をやる日本人にスイスから奨学金とは実に奇妙な話ですが、とにかく私はすがりつきました。後で知ってぞっとしたのですが、その時の条件は「必ず学位を取得して論文を一冊、同財団に寄贈すること」でした。完成するかどうか分からないので、この条件を事前に知っていたら遠慮していたかも知れませんが、そのプレッシャーがかからないようにとの配慮から知らせずにおいてくれたのでしょう。そして4年目（実質的には3年半でしたが）は、論文もかなりの進捗を見せているということで、スペイン政府が2年の間隙の後に奨学金をとうとう例外的に更新してくれました。

奨学金といっても寮費を払うと、数千円しか残りません。それでもってタイプライターのリボンを買ったり、ボールペンや用紙を買ったりするだけでほとんど消えてしまって、文献を買うなんてことは及びもつきませんでした。私は学位論文のためには一冊も本を買わないことにしました。全面的に図書館に依存して、たまたま買うことができるお金が残った場合には、将来の勉強に役立ちそうな文献に限定しました。今でこそ復刻その他で入手が容易になったものに1611年のCovarrubiasの辞書があり、その1943年版がどうしても座右に必要でしたが、マドリード中

の古書店を回ってもなかなかみつかりませんでした。ある時ようやく見つけたものの、店主は翌日アメリカの大学に郵送することになっていると私に言いました。私は明朝一番でお金を持ってくるから私に回してくれ、と執拗に懇願しました。値段は寮費のほぼ一ヶ月分でした。寮に戻って何人かに頼み込んで借金をして翌朝、古書店に行って入手できたのですが、その前夜、何回もその辞書の夢を見ました。古書店に行ったら発送した後だった、無事に入手できたものの持ち帰ったら白紙だった、落丁だらけだった等です。

本を買う余裕がなかなかなかったことは、意外な効果をもたらしてくれました。たとえば持ち金が3千円で、さし当たり買いたい本が5万円分あったとしたら、書店には申し訳ないのですが、延々と時間をかけて中身をチェックして厳選するべく、何回も書店に通うしかありません。それを3年以上続けると、いつの間にか文献の選球眼ができるという副産物でした。本のタイトルでは釣られなくなります。そして買う場合の狙い目は、発行年からしてそろそろ絶版になるのではないかと思われるぎりぎりの書物です。どんなにすばらしくても、新刊書の場合には、まだ数年経っても購入できるはずで焦る必要はないと考えたのです。もし私に経済的な余裕があったら、買いたい本を買いつけることで、本に対する選球眼はなかなか得られなかったのではないかと思います。頻繁に通う割には一向に買わない日本人ということで書店の親父にじきに覚えられ、そのうちに私の選ぶ本の傾向を見抜いて、貴重な本が入荷するとわざわざ電話をかけてきてくれるほど親しくなったりもしました（経済的に買えないものは、やはり買えなかったのですが）。

さて論文が一応完成したものの、審査のために計6部のコピーを取って製本しなくてはなりません。製本が一番安いところを見つけておきましたが、途方に暮れたのがコピーです。数百ページのもの何部もコピーするお金など、私にあるはずがありません。今と比べてコピー代も高かった時代です。苦し紛れにマドリッドに進出している日本企業の現地の所長さんに正直に説明して、なんとか会社のコピー機を原価で使わせてくれないかと掛け合ってみました。いくらぐらいかかるのか尋ねられ、予想がつかないけれども、通常のコピー屋さんに頼んだら20万円ぐらいかかってしまうかも知れないと申し上げると、予想外の答えが返ってきました。「20万円じゃ、うちの会社はつぶれません。でも貴方の論文がもし通ったら、最初に報告するのは私にお願いします」。会社の業務の邪魔になってはいけないということで、所長さんは日曜の朝早く私のために会社を開けてコピー機を自由に使わせてくださいました。論文審査があった日、帰り道の公衆電話から所長さんにお礼の電話を真っ先にかけたのは言うまでもありません。その後、所長さんは何人かの日本人を集めて、私のために焼き肉屋でお祝いの会を開いてくださいました。今だから書くのですが、コピー機を使わせていただきながら、私は博論とは別のものを多少コピーしてしまいました。どうしても日本に持ち帰りたい文献です。帰国する時には、将来の研究を見据えた数千枚の文献コピーを郵送したのですが、そのうちの何十分の一かは、この時にドサクサ紛れにコピーしてしまったものです。

## 杞憂？

留学時代のことを、当初考えていた以上に長々と書いてしまいました。当時の様々な出来事や人との出会い、あるいは恩師に関して書きたいことは、まだまだ無数にあるのですが、それはあまり参考にならず、私の独りよがりになってしまう危険性が高いので、この辺でやめにしておきます。

スペインに3年半もいた割には国内をろくに旅するチャンスというかお金もなく、要するにスペインを知らないまま帰国するとすぐ、私はスペイン文学関係の科目やスペイン語以外に、大学院でスペイン語史の授業を担当することになりました。つい先ほどまで学生さんだった私は、別の意味で自分の力のなさを思い知り、泥縄に近い予習の日々を送ることとなりました。そしていつの間にか定年という、嬉しいような寂しいような現実が着実に迫っている昨今、あらためて思うことと、敢えて若い研究者を意識しつつ、多分に憎まれ口を書き加えさせていただきたいとします。

それは業績と研究ということです。長い教員経験からして現在、専任の職を得るのが困難で、なにかという業績を求められてしまうのは十分に承知しています。つまり研究能力の証拠を見せろと言われるわけです。となると若い研究者は競って業績を発表しようと必至になります。それが無理からぬこととはいえ、一言で言うと、腰の据わった研究を見かけることが（少なくとも私の分野では）ほとんどありません。勉強はしているようなのですが、いったいどこまで熟考した上で書いているのか伝わってこないのです。都合のいいデータを寄せ集めて一定の道筋をつけようとしているだけのものが多い、と言っていいかも知れません。やたらに外国語の文献を博引旁証することをもって、鬼面人を驚かすようなものが少なくありません。外国語文献を「カッコよく」引用していても、たまたま私がそれを読んでいた場合、その文献を書いた人がどういう立場で、どういう視点に立脚してその主張をしているかなんぞにはお構いなく、自分の記述を好都合に裏づけるのに有益だからという引用が少なくないのです。あるいは引用をしていても、本当に文献全体を精読してみると、原著者の意図はその引用とは正反対だったりするものも散見します。ご都合主義の孫引きが目立ったり、語学として難解な箇所はすっ飛ばして、分かりやすい箇所を鬼の首を取ったかのように引用する・・・ちゃんと読んでいけば、豊穰な意味で原著書の食い違いに気づいておもしろい指摘ができるのにと溜息をつかざるを得ないことも少なくありません。学部時代に私淑した文化人類学者の石田英一郎先生が、こんなことを指摘しておいでです。「必要なのは、それがどんな大家の説であろうと、他人のことに拘束されて学問しないこと、どこまでも自分自身のことばで考え抜くことである」。<sup>5</sup>

別の、とても大事なことがあります。「この若い研究者はなんのために、この論文を書いたのだろう」、「《自分が分からないからこそ自分で納得が行くまで徹底的に調べあげ、自分に説明し

<sup>5</sup> 『文化人類学ノート』、昭和52年、6ページ。

てみせる」という原点に本当に立ったのだろうか、「この若者は、この論考を準備もしくは書いている段階で、鳥肌が立つほどの知的興奮を味わうことができたのだろうか」、「小手先だけの業績争いに巻き込まれているだけではなからうか」……。学生時代の私が書物を通して石田先生と並んで影響を受けた先生の一人に、ギリシャ哲学の田中美知太郎先生がいらっしゃいます。田中先生はこんなことを書いておいでです。

学問というのは、デカルトが樹木に見立てた存在であって、枝葉の先だけでなっているのではない。わが国の学術論文などを読んで感ずることは、すぐに先が見えてしまってそれ以上の発展が望めない。いわゆる尖端的研究ばかりで、根本のつながりが欠けているのではないかということである。<sup>6</sup>

ちなみに私の留学中、日本語の書籍ではとりわけ次の3人のものを繰り返し読んで教えられるところが大きかった。田中美知太郎の『時代と私』、中村元の『東洋人の思惟方法』（全4巻）、岩下壮一の『神学入門』（全3巻、現在は[再度絶版のようですが]『カトリックの信仰』に改題）です。それぞれ壮大なスケールで書かれた名著中の名著です。

もちろん若い研究者が「専門」にこだわるのは、痛いほどよく分かります。専門家として専門研究の名において重箱の隅をつつつくのも、よく分かります。でも重箱には8つの隅があって、どの隅をどういう視点からつついているのか、しっかりと位置づけを意識してのことなのか否かと（自分を柵に上げて）思うことがしばしばです。専門という「選手宣誓」は聞こえがいいのですが、一つ裏を返すと、それは単にそれ以外の分野の無知や不見識を正当化しているだけの場合が少なくないようです。もちろんなんでも屋になれというのでもなければ、なることもできません。しかし若いのなら、逆に若さのエネルギーを駆使して広い視野を培っていただきたいと思うのは、決して私だけではないはずで

私が恩師 Lapesa 先生から学んだ無数のことの一つは、絶対に自分の「専門」云々を豪語しないことです。若い学徒に初めてお目にかかる時、よく専門を聞かれます。私は仕方なくスペイン文学だと言います。するといぶかるようにして、スペイン文学の何を、と必ず聞かれます。私は「まあ、どちらかという古典文学を勉強しています」と答えます。さらにいぶかしそうに「いえ、先生は何世紀の何が専門ですか？」……。私は研究とか専攻という単語を大上段に振りかざすのが性に合わないの、「いや、適当に勉強しているだけです」とお茶を濁すことにしています。恩師は「専門」や「研究」という語を滅多にお使いになりませんでした。私が教員になって以降、スペインに渡って恩師にお目にかかる度に、先生は「今、貴方はどんな勉強をしておいでですか」

<sup>6</sup> 「読んで理解すること」、『文藝春秋』、昭和52年第59巻第9号、206ページ。次の指摘も参照。「わたしたちに欠けてゐるのは依然として正確な知識と知性ではないのかとも思ふ。まだわたしたちのところには真の学問が根づいてゐないのである」。『時代と私』、昭和46年、414ページ。

とだけお尋ねになるのが常でした。本当の専門家になるためには、フィロロジの原義がそうであるように、途方もなく広範にして深い勉強が必要です。よって少なくとも勉強に向かう姿勢だけは、恩師にならって「専門」を口走らないことにしているわけです。いわゆる専門として成り立ったか否かは、当人ではなく他者あるいは後代の判断を、静かに待つべきものだと少なくとも私は思っています。

## 再度外国語

もう一つだけ憎まれ口を叩かせてください。それは言葉の問題です。これからの日本の研究者は、もっと外国語で書いて、外国語で口頭発表をすることをもって、自分を窮地に追いやる必要があるということです。日本における西欧の研究は、田中美知太郎先生のご指摘を待つまでもなく、実はまだまだ大きく遅れています。日本の論集のタイトルを眺めると、まさに世界の最高峰に行くようなタイトルのものが圧倒的で、私などが出る幕ではないと思わざるをえません。ただどうでしょう。敢えて言うなら、往々にして「日本語というマイナー言語の隠れ蓑」に身を隠している場合が少なくないように思われるのです。日本語で書かれた論文の類を、もしそのまま英、仏、独、西語などに訳して出したら、そのかなりなものは、孫引きや実質的な剽窃がばれてしまうように思えてなりません。私が今までレフェリーをやったものでも、ひどいものになると30箇所近くが剽窃だったものもあります。もちろん没にしました。

私たち日本人は日本語という母国語を背負い、苦勞して外国語を身につけなくてはならないハンディを負っているとこぼしながら、実はちょうど逆で、誰も読んでいそうにない外国語文献を「縦横無尽に」日本向けに引用しながら、本体を日本語で書くことで限定的な「業績」を声高に主張する・・・他の分野のことは分かりませんが、少なくとも私の分野では、日本で博士号を取ることは（少なくとも現段階では）絶対に不可能であることを、私は経験的に承知しています。まず必要な文献がない、よってたまたまあり合わせのもので誤魔化す。学位論文は「ないものがない」環境で書くのでなくては勝負になりません。それと私の分野では、まだまだ（もちろん私を含めてですが）本当に高度な学術指導を適切にできる人材は育っていません。時々、日本の他大学で博士論文を準備中という人が相談に来ますが、話しをしていて、基本知識のあまりのなさに愕然とさせられることがしばしばです。別に私はスペインかぶれでもなんでもありませんが、スペインだったら絶対に修士論文としても相手にされないレベルです。

こうした認識のもとに私は遅ればせながら、ここ20年ぐらいでしょうか、できるだけスペインで研究発表をし、スペイン語で論文を書くように心がけてきました。日本語のほうが楽に決まっていますが、怠惰な自分を妥協の許されない環境に追い込みたいのです。少々大げさに言えば、これは学究生活を送る者の生きざまに深くかかわるところだと思います。尊敬する高名なアジア研究者が、「日本で大山の大将になったってしかたありません」と私におっしゃったことを、私は深く肝に銘じています。スペインでスペインのことを学術レベルで論じようとする以上、啓蒙

的な事項で時間や字数を稼ぐことは絶対に許されません。「日本人にしては、まあ比較的良好に勉強しているわい」などという消極的な評価なのかどうかは、相手の反応を見ていけばすぐに分かります。否、分からなくてはなりません。そしてこれは本当に気が遠くなるほど大変で、日本の西欧研究が「研究」として確たるものとなるためには、どうしても乗り越えていかねばならないところです。西欧研究者ではない数学者や物理学者が英語を介して国際的にどんどん活躍しているというのに、人文あるいは社会科学系の「西欧研究者」が、いざとなると国際舞台を回避して日本に閉じこもってしまうのは、なんとも皮肉なこととしか言いようがありません。

私が若かりし頃には留学そのものが、まだいろいろな意味で困難でしたが、今は状況が大きく異なっています。そして今後益々、状況が異なってゆくのは不可避です。語学力におんぶして学問を誤魔化すことも、もちろん許されません。ちなみに私は昨年、北スペインの大学に招かれて研究発表をし、その後の討議に参加を義務づけられたのですが、英語を母国語とするオックスフォード大学の教授と日本語を母国語とする私の討議は当然ながらスペイン語で進められ、それを聞いていたスペイン人数人、さらにはイタリア人が割って入りました。博士論文を書いているイタリアの女子学生は興奮して、いつの間にかイタリア語で話していて場内の苦笑を誘い、かえって会場が和みましたが、これなども今後の日本で見られる光景になることを切望したいと思いません。

さてさて、ずいぶんまとまりのない話しを気の赴くままに書いてきました。否、書いてきてしまいました。自分を棚に上げたうえで、若い研究者にきついことを書き過ぎたかも知れません。実際には私の単なる偏見もしくは認識不足でしかなく、私の根拠のないお節介などどこ吹く風で、素晴らしい研究を展開している若き研究者が多数おいでなのかとも思います。だとするなら願ってもない嬉しい誤算です。本稿冒頭でも「反面教師」とお断りしたことを、今一度想起していただくと幸いです。いわゆる業績が業績のための業績となることなく、堅実に次の深化につながり、自分を鍛えるものとなってゆくことを老婆心ながら切望しております。